

特集3 | ホスピタリティに見るデザイン

5

DESIGNING FOR HOSPITALITY

ホテルのインテリア
万平ホテル | Mampei Hotel

「万平ホテル」は1894年、当時、日本では目新しかった西洋式ホテルとしてオープンした。そして今、林の向こうにまるで絵葉書のように佇む万平ホテルは、1936年、久米権九郎の設計によるものである。爾来74年、避暑地・軽井沢の歴史と共に歩み、客を魅了し続けている。

「おもてなしは心なり、ホテルはひとり」という言葉は、常にスタッフの胸に刻まれている創業者のスピリッツだ。客をもてなすためのおもてなしの心は、そこから始まったという。

ここには、悠久の時を重ねてきたクラシックホテル特有の「本物」の風格が漂っていた。

軽井沢「万平ホテル」は、1936年に建築家・久米権九郎によって設計された。久米権九郎は現在の久米設計の創立者である。ドイツで建築を学び、木造耐震工法で博士号を取得し、その後ロンドンのAAスクールで建築デザインを学んだ。1929年に帰国し、1932年に建築事務所を開設した。そして、三井男爵家の葉山別荘、大磯の城山荘と呼ばれる別邸を久米式耐震木構造で設計するなど、本格的

な活躍を開始している。

久米の父・民之助は、皇居二重橋の設計者として知られ、土木設計者であるとともに、実業家として数々の事業を興して財を成し、三井家、松平家などの貴族社会、特権階級との交流が深かった。権九郎もそういう環境の中で育ち、かつヨーロッパ留学によって、さらに西欧上流階級の生活スタイルをも身につけて帰国した。その上、優れたデザイン感覚があったため、ヨーロ

ッパの先進的で上質なライフスタイルを表現することを得意とし、当時、ヨーロッパを席卷していた近代モダニズム的な表現にとらわれない、自由な発想による建築、デザインを展開した。万平ホテルを設計するにあたり、当時の久米の言葉として「建築はその土地に生えたものでなければならない。場所が軽井沢だから、土地に合うように信州の民家のデザインを見て歩きデザイン

のヒントにした」という言葉が残っている。ドイツで確立した久米式耐震木構造をベースに、日本の民家風なデザインを取り入れた結果、ハーフティンバー風の外観となった。スイス、ドイツの山荘風であり、信州・長野の民家風でもある独特のイメージは、気候風土がヨーロッパに似ている軽井沢の景観に、違和感なくとけ込んでいる。久米は同時期に「日光金谷ホテル」の和風別館や「富士ビューホテル」を設計し、

箱根「富士屋ホテル」のデザインにもかわるなど、当時的高级リゾートホテルとしての草分け的な建築を残している。いずれにおいても久米は、常に人々の本来あるべき美しく豊かな生活と、快適な空間を追求した。そしてそれが久米の哲学であった。特に万平ホテルでは、人々があこがれるヨーロッパの山岳リゾートホテルの雰囲気を強く打ち出し、非日常性を強調している。例えば、エントランスロビーやデッ

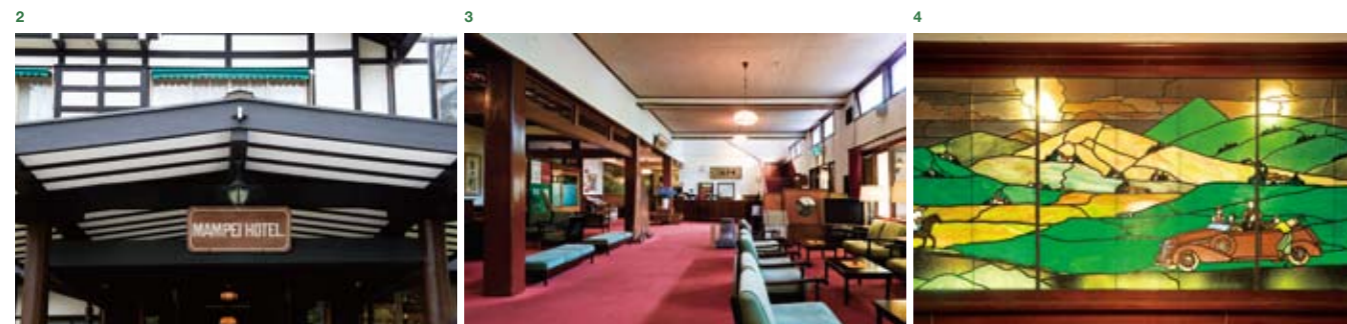
キテラスにつながるコーヒーハウスやバーなど至る所に、欧風と和風の渾然一体となったデザインを施し、また、エントランスの欄間に彫り込みの意匠、障子風のデザインやステンドグラスを多用するなどして、独特の雰囲気を出している。特に、ダイニングルームは格天井にして、中庭に向けて広縁風の客席を展開している。そしてホテルの基本的な構成をとりながら、日本家屋の伝統である「自然との一体感」や、素材感を強調したディテールによって、リゾート感を高めている。そこには、木材にこだわり、日本の伝統的手法を最大限に取り入れようとした建築家の意図が見事に表現されている。

近代日本を代表する高級リゾートホテルとして、万平ホテル、日光金谷ホテル、富士屋ホテルは、今も多くの人々に利用され、愛され、親しまれている。これは、久米が体得し、追及し、そして多々の人々に伝えようとした真に上質なライフスタイルが、70年を経た今でも十分に通用することを物語っている。

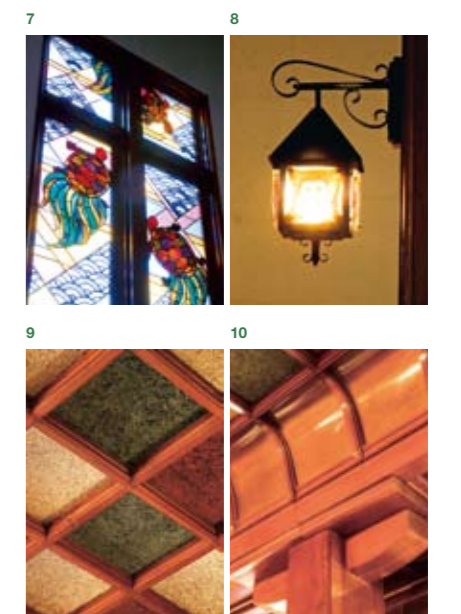
ARCHITECT'S COMMENT

アーキテクト・コメント | ゆったりとした豊かな空間を

岡本 賢 | Masaru Okamoto



- 1— 外観：ハーフティンバーの白壁と木のコントラストが印象的である。長野の古民家を連想させ、今では軽井沢のシンボルとして親しまれている
2— 開業時から変わらない看板がいつも温かく客を迎えている
3— ロビー：和と洋が混在し、独特の雰囲気を醸し出している。随所に細部へのこだわりが現れている
4— メインダイニングルームと廊下を仕切るステンドグラス（作：宇野澤秀夫）：昭和初期の最も進んだ軽井沢が描かれている。参勤交代のステンドグラスもあり、軽井沢の時代を対比している



- 5— カフェテラス：陽光が降り注ぐ緑あふれる空間。夏はガラス戸を取り外し、テラス席にもなる
6— メインダイニングルームの中庭に面した客席：ワインレッドの色調でまとめ、重厚さと上品さを演出している
7— ロビー：和と洋が混在し、独特の雰囲気を醸し出している | 8— 優雅な雰囲気を醸し出すアンティークの照明
9— メインダイニングルームの格天井：格子の割りが細かく、格天井としてはモダン。アットホームな雰囲気を出すため、あえて装飾は施さなかったという | 10— “折上げ格天井”の折上げ部分

旧軽銀座通りの喧噪から離れ、緑の小道を抜けると姿を現すのが「万平ホテル」だ。ひときわ目を引く、白い塗り壁と木の柱梁のハーフトィンバーの外観。吸い込まれるように一歩足を踏み入れると、どこか懐かしい匂いがしたのは気のせいだろうか。いや、確かどこかで出会ったような穏やかでゆったりとした雰囲気が、そこには漂っていた。「1936年から今も活躍するアルプス館は、長野県・佐久地方の養蚕農家をイ

メージして、建築家・久米権九郎が設計したと伝えられています。ですから、私どものサービスの根底にあるのは、我が家にお招きするような家庭的なおもてなしです。古民家を彷彿とさせる空間で、肩肘張らず、のんびりとした時間をお過ごしいただきたい」と富田努氏は語る。一瞬にして心が解きほぐされる感じがしたわけはここにあったのだ。「万平ホテル」の開業は1894年。旅籠

「亀屋」が「万平ホテル」と改称し、営業を開始した。その頃の軽井沢といえば、カナダ人宣教師が避暑地として紹介したことから、一躍、注目を集めていた。しかし、外国人客は急増するが、彼らを満足させる宿はない。それを目の当たりにした佐藤万平は、洋風ホテルの必要性を強く意識し、当時、日本では珍しかった西洋式ホテルを軽井沢にオープンさせた。見よう見まねでフランス料理を習得し、スタッフにも西洋の

生活習慣やマナーを徹底して叩き込んだ。その結果、外国人はもとより、避暑地を求めていた文化人に好まれ、万平ホテルの名は全国に及んだ。「ベテランスタッフの存在は、何にも代え難い当ホテルの財産です。お客さまによって変えるべき“サービスの密度”の違いを熟知していて、若いスタッフが肌でその技術を学んで身につけていく。結果、お客さまが特別な心地良さを感じるのではないかと…」。「いつもの宿に帰

ってきた”と思わせる秘訣を見たような気がした。ジョン・レノンが幾度となく訪れたことは、つとに有名だが、氏を魅了したのもおもてなしだったようだ。遠からず、近からず…、有名人へのさりげない対応に惹かれたというエピソードが残っている。今でも、著名人と同じ上質なひとときを求めて訪れる客は多い。さすが軽井沢の歴史と共に歩んできたクラシックホテルの接客術は奥が深い。

“おもてなしは心なり、ホテルはひとり”という、万平ホテルに受け継がれてきた言葉がある。すべてはここから始まっている。今もその精神は薄れていない。創業者のスピリッツを大切に、これからも変わらないおもてなしの心で、客を迎えていこう。

【建築概要】

名称：万平ホテル
所在地：長野県北佐久郡軽井沢町軽井沢925
客室数：109室(アルプス館：13室) | 開業：1894年
ホームページ：<http://www.mampeico.jp/>
設計：アルプス館：久米権九郎

INTERVIEW

インタビュー | 100年変わらないおもてなしの心で…

富田 努 | Tsutomu Tomita

とみた・つとむ——万平ホテル企画推進室室長

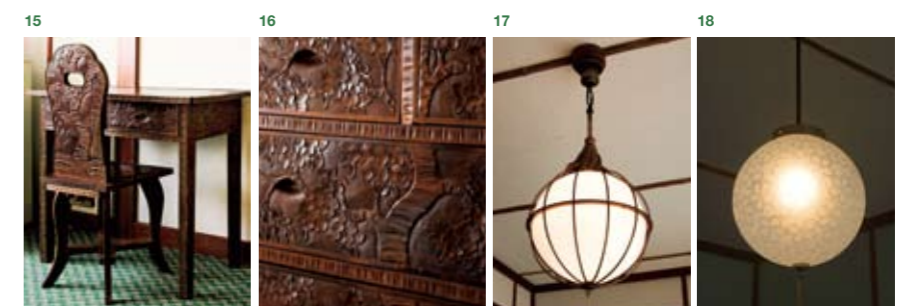


11—アルプス館の客室のベッドルーム：木調でまとめ、細い竹のグリッドが軽快さを演出している

12—壁やガラス格子など、家具以外は1936年から変わっていない。当時の面影を残す、ラグジュアリーな空間

13—幾何学模様が斬新なガラス格子

14—客室から見たカラマツの林：ホテル入り口から奥へ奥へと緑が広がり、心身ともに癒される



15—ライティングデスク：軽井沢の伝統工芸・軽井沢彫りが施されている。他にタンス、鏡台など、調度品は軽井沢彫りでまとめられている

16—「洋風建築に合った家具を…」が軽井沢彫りの発端。外国人客に喜ばれる日本の国花・サクラの模様が主流だという

17,18—客室を彩る照明器具